

## 日本の歴史 37

### 『絵はがき 100 年： 近代日本のビジュアル・メディア』

橋爪紳也著（朝日新聞社 朝日選書 2006）

本書の請求記号 210.6 Has

稲垣 宏行

絵はがき。それは展覧会や観光地の売店などでよく見られますが、現在はプリンターで自作したり写真屋で作成を依頼するなど、手軽に出来ます。絵はがきは我々にとって文通の上での「お洒落」の意味合いが強いものですが、私製はがきの発行が許可され、絵はがきが庶民にとって身近なものとなった明治33（1900）年頃には、より重要な意味がありました。

当時は、テレビは勿論、ラジオも無く、新聞が主なメディア媒体だった時代です。そんな時代、絵はがきは新聞より身近で速報性があるものとされました。そして当時の社会では、絵はがきの流行が国民の地位増進の前兆や社会的進歩の尺度と考えられていたようです。絵はがきを取り扱うテーマは多彩です。建築物、花見や海水浴、祭りの風景といった身近なものに留まらず、事故や地震のような災害の様子を写した物まで存在します。また、飛行機の登場やオリンピックの開催のような大きな出来事が起こった際には、その様子を報じた絵はがきが続々と発行されていたと言えます。建築史家の著者は、本書の中で自らがコレクションとして所有する内の約90枚の絵はがきを例示し、そこに写る絵あるいは写真の意義や、それらが出来た時代背景などを分析しています。

例えば、大阪の通天閣。現在は広告塔の外観ですが、元々はエッフェル塔を意識した建物でした。それが時代の都合によって本来の存在意義を変えていったことが、著者の2枚の絵はがきによって示されています。明治末頃から登場した街灯も、当初は夜道を明るくする役割のみに目が向けられていました。しかし、昭和5（1930）年にはネオンサインによる広告看板が登場するようになり、時代の流れと共に街を美しく照らすことに重点が置かれていったことが、数枚の絵はがきによって証明されています。

絵はがきが歴史的瞬間を伝える記録写真として

の性格を持っていることも著者は指摘しています。確かに、先程の通天閣や街灯についてもそうですし、飛行機の登場やオリンピックの開催という、当時としては画期的な出来事を題材にした絵はがきにもその性格は見て取れます。絵はがきはその時代の世相や風俗を知る上で重要な、近代の歴史資料とも言えます。そのため、どれほどそのテーマが身近でも、見逃すことは出来ません。ただし、土器や木簡、古墳などの遺物や遺跡とは違い、ありのままの真実を写した物ではありません。著者も実際には合成や脚色が加えられていたものもあったと述べていますが、同時に、絵はがきが「時代の気分」を読み取る上で無意味では無いとも考えています。

絵はがきの登場から100年余り。日本を含めた世界の文明はそれから大きく変わり、今も変容を続けています。本屋の店頭などで見られる書籍が電子媒体として閲覧できるようになり、新聞もインターネットの電子版に置き換わったものがあるようです。絵はがきも希少品となると一万円以上の値段のものがあると言いますが、我々が当たり前のように入手できる紙媒体のものも、やがては絵はがきのように、過去の遺物として語られることでしょうか。しかし、それらは、どれほど時代や文明が変わろうとも、忘れられることはないとも思います。著者は本書の中で、今では主流となった携帯電話のメールと絵はがきが「画像入りの私信」という一点で、時空を超えて繋がっていると述べています。現在の我々の暮らしは過去を支点に成り立っています。本書のテーマと先程の著者の見解は、過去・現在・未来を繋ぐ歴史の重要性を強く主張していると考えられます。それ故、絵はがきにしても、新聞や書籍などにしても、希少になりつつもその存在をいつまでも留めていくのだと思うのです。

いながき ひろゆき（司書・情報サービス課）